

本日はイエス様と弟子達がベツサイダの村に行かれ、イエス様が一人の盲人を癒される箇所。7章にも同じような癒しの記事があったが、今回の癒しは他の癒しの箇所とは異なる点が二つある。その事を中心にみことばから主が私たちに語られている事を共に聞いてまいりましょう。

I. 人々によって連れて来られた盲人男性

「彼らはベツサイダに着いた。すると人々が目の見えない人を連れて来て、彼にさわってくださいとイエスに懇願した。」(22)

人々が目の見えない男性をイエス様の所に連れて来て、この男性に触れて欲しいとイエス様に懇願した。この「人々」というのがこの男性の家族や友人であったかは書かれてはいない。人々の中には純粹にこの男性が癒やされてほしいという人もいたかもしれない。しかし人々がこの男性の家族や友人以外であるなら、ベツサイダの村の人々はただイエス様の奇蹟を目の前で見たいがためにイエス様の元に盲人の男性を連れてきた可能性がある(この理由はベツサイダの人々である事に関係している)。

II. 人格と個別の交わりを大切にされるイエス様

「イエスは、その人の手を取って村の外に連れて行かれた。そして彼の両目に唾をつけ、その上に両手を当てて、『何か見えますか』と聞かれた。」(23)

これまでイエス様は様々な癒しを行われたが、今回は他の癒しの時とは異なる点がある。その一つはその場ですぐに癒されるのではなく、その人の手を取ってわざわざ村の外に連れて行かれ一対一の状況をつくられたということ。それはなぜか？

①イエス様ご自身の働きが誤解されないため。目の見えない男性を連れて来た人々の動機が善意の部分もあったかもしれないが、癒しの奇蹟を目の前で見たいという動機が強かったはず。前回もパリサイ人がイエス様に「天からのしるし」を求めるといふ挑発を受け、それを退けられたばかり。イエス様はご自身の力や能力を見せびらかし、有名になるために来られたわけではなく、救いをもたらすためにこの世に来られた。

②イエス様は彼を村から引き出されたということ。この男性のいる村はベツサイダという村で悪に染まっていた。「ああ、コラジン。ああ、ベツサイダ。おまえたちの間で行われた力あるわざが、ツロとシドンで行われていたら、彼らはとうの昔に粗布をまとい、灰をかぶって悔い改めていたことだろう。おまえたちに言う。さばきの日には、ツロとシドンのほうが、おまえたちよりもさばきに耐えやすいのだ。」(マタイ 11:21-22)。それ程、この村の人々は悪に染まっていた事がここから分かる。イエス様は男性をその悪に染まった村から引き出された。「村には入って行かないように」(26)と言われたのもそのため。私たちクリスチャンは滅びから救いへ、またこの世の欲の価値観から神の国とその義をまず第一に求める価値観へと引き入れられた者達。

③その男性に対するイエス様の愛とご配慮から。男性は目の見えない事で多くの苦勞をしてきたと想像に難くない。当時の福祉事情は現代とは違い、目が見えないだけで仕事が無く経済的には困窮し、差別されてきた。「人が見えます。木のようですが、歩いているのが見えます」(24)とあるように彼は先天性ではなく人生の途中で失明した事が分かる。初めから目が見えない人も人生の半ばで失明した人もどれほど計り知れない絶望感に陥る事か想像を絶する。イエス様は男性のそのような苦しみを知っておられたため、人々の前で見世物のようにされて癒されるのではなく彼の人格を大切にされ一対一の中で癒された。

これらの理由でイエス様はその男性を村の外に連れて行かれ一対一の状況をつくられた。なんとイエス様は配慮に満ち最善の方法で導かれるお方でしょうか。それは私たち一人ひとりにも、神の救いへの導かれ方が異なり、ふさわしい導き方をしてくださるという事。

イエス様がその男性の「手を取って」とは「つかむ、助ける」という明確な意思が表されている言葉。ペテロがガリラヤ湖の上を歩いたが怯えて溺れた時にイエス様がペテロの手を掴んだ言葉と同じ。ペテロの信仰がどうであろうともイエス様はペテロを離す事なく手をつかんでおられた。目の見えない男性に対してもイエス様は優しくもしっかりとその手をつかんで村の外へ導かれた。聖書には記されてはいませんが村の外へ行かれる道の途中、イエス様は男性に対してずっと無言のままではなく愛のある会話を一対一で話されたはず。今まで男性の耳には自分を悪く言う声しかなかったがイエス様は違い、男性の心は平安に満たされた。イエス様は私たちが癒されれば終りという機械的な事ではな

く、常にイエス様が共におられる事を覚え祈りの中で交わってほしいと願っておられるお方。

II. 段階的癒し

「すると、彼は見えるようになって、「人が見えます。木のようですが、歩いているのが見えます」と言った。それから、イエスは再び両手を彼の両目に当てられた。彼がじっと見ていると、目がすっかり治り、すべてのものがはっきりと見えるようになった。そこでイエスは、彼を家に帰らせ、「村には入って行かないように」と言われた。」(24-26)

本日の盲人の癒しの記事のもう一つの特徴は段階的に癒されたということ。段階的癒しの意味は救いに与った者の心の目の開かれ方を指している。イエス様を信じて救いを得た事実と、救いの恵みの確信が与えられるまでに時間を要する事があるということ。神は私たちの霊の目が開かれるまで、その時々に必要なみことばや試練を繰り返し通し、霊的癒しの回復の御業を成して下さるお方。大切な事は私たちがイエス様をじっと見続ける事、神の前に立ち続ける事。「**信仰は聞くことから始まります。聞くことは、キリストについてのことばを通して実現するのです。**」(ローマ 10:17) とあるように、どんな時も礼拝、また日々の神のみことばに聞き続けること。そうであるならば主は私たちの心の目を開き、「すべてのもの（どれ程自分が罪深く、私のその罪のためにイエス様が十字架にかかり復活して下さったその深い主の愛）がはっきりと見える」ようにして下さるということ。

救いの恵みの確信を願っている方がおられるなら、主なるイエス様を見つめ続けましょう。必ず神はあなたに主の恵みをはっきりと見えるようにさせてくださる。

そして何よりも私たちが覚え感謝したい事は、主の救いの恵みと愛を私たちにはっきりと示し見えるようにイエス様が十字架の死と復活の御業を成して下さったという事実。私たちが主の十字架の前にひざまずき、主ご自身の尊い命を惜しむことなく私たちに捧げて下さったその愛の姿を目の前にするならば私たちの霊的な目が開かれ罪が分かり、主の十字架は私のためであった事をはっきりと見えるようにされる。その時私たちはその場にただ泣き崩れると共に主への感謝と喜びに満たされる。本日の箇所はマルコの福音書のちょうど前半と後半の中間地点で、この2段階での癒しの記事が記されている事にも著者マルコの意図がある。マルコの福音書の前半と後半のポイントを見ると分かる。

前半は、イエス様の「わたしについて来なさい」との恵みの招きに応えて、主に従っていく弟子達の姿で、それは本日の盲人男性のボンヤリと視力を取り戻した状態であった。弟子達は間近で救い主なるイエス様とその御業を見、神の国について聞いてきたにも関わらず、イエス様に目があっても見ないのですか、悟らないのかと言われてしまう有様。本当の恵みをはっきりと見る事ができずにいた。後半は、弟子達は相変わらず自分達の立場やこの世のものに心を奪われ、大切な主の恵みについてはよく分からずにいる有様であったため、そのような弟子達にイエス様は何度も繰り返し教えられる。イエス様はへりくだられ、最終的には全ての人のためにご自身の命をささげられる事を弟子達に教える。そして言われた通り十字架の道に進まれる。弟子達は十字架の道に歩まれるイエス様を裏切ってしまうがイエス様は彼らを見捨てることなく十字架にかかれよみがえりの姿で彼らの前に現れて下さった。すると弟子達の目がはっきりと開かれ、イエスは主（真の救い主）である事を悟る事ができた。また十字架の正面に立った百人隊長が「**この方は本当に神の子であった。**」(15:39) と告白。つまり、主の十字架の前に立つ者だけがイエスが主である事を分かるという事。

私たちは主との一対一のみことばと祈りの交わりの中で主の十字架の前にひざまずき、霊の目をいつもはっきりと開かれ、主が私たちに与えて下さった命がけの愛の恵みに日々心を感謝と喜びに満たされ、主の素晴らしい恵みを宣べ伝えて行く者でありたい。また、「**自分は何かを知っていると思う人がいたら、その人は、知るべきほどのことをまだ知らないのです。**」(1 コリ 8:2) と目が開かれたパウロが述べているように、私たちは霊の目が開かれ主の恵みについて分かるようにされたとしても、ほんのわずかな事しか分かっていない者である事を同時に覚え、謙遜に日々、主ご自身と主の恵みを知る事を求めて主の似姿に変えられ続ける者でありたいと願います。